ツンベルグの日本語観察

杉本つとむ

はじめに

仏訳本の性格　拙論は仏訳本「ツンベルグ旅行記」（一七九六年刊）(Voyages De C.P Thunberg A Paris AN IV.〔1796〕)[1]の中の日本語観察記録及び語彙集の部分を基にして、ツンベルグの日本語観察のあらましを記述したものである。本論に先だって、原本と仏訳本の関係について述べておく。原本「一七七〇―一七七九年にわたるヨーロッパ・アフリカ・アジア紀行」(Resa uti Europa, Africa, Asia Förrättad åren 1770―1779) は一七八八―九三年に八折版四冊にして、ウプサラで刊行された。その第三巻（一七九一年刊）に「日本語」(Japanska Språket 原本 P.294―296)（これは、後述の「日本語観察」と異なることは、勿論である）と瑞日対訳ABC順の「語彙集」原本 P.296～353 があって、仏訳本も、この二つの部分を訳出したことに間違いはない。しかし、原本と、仏訳本では、次の点で全く異なっている。(1)仏訳本には、原本にない文法観察の重要記事が加わっていること。(2)仏訳本は、語彙が、日仏対訳順になっていること。(3)しかも両部分が、第三巻に一まとめになって訳出されていること。これは、他の英訳四巻本[2]（一七九五年刊・ロンドン）や独訳二巻本（一七九二―四年刊・ベルリン）[2]とも異なるところである。この訳本は、原本直訳と考えられる　これはどう説明されるべきだろうか。幸い著述目録があって（原本・仏訳本共に）そこに、「日本語観察」(Til Societas Litterariauti Upsala; 8 Ob-fervationes in Linguam Japonicam, 1792, Vol.5, P.258) の書名が目につく。これは、ツンベルグが、「ウプサラ王室科学協会新紀要（以下、新紀要と略称）」(Nova Acta Regiae Societatis Scientiarum Usaliensis) の第五巻（一七九二年）に、ラテン文で発表した四折本・十六ページの「日本語観察」[1] (OBSERVATIONES IN LINGVAM JAPONICAM.; CAR.PETR.THUNBERG.) と、同一のものかと解される。（ウプサラ図書館よりの解答では、これ以外に、ツンベルグの観察記はないだろうとの事であった。）そこで、仏訳本の文法観察記録は、この論文を仏訳して加えたと推定できる。事実吉町吉雄氏は、仏訳本の文法観察のより所を上記新紀要の論文を仏訳して加えたと解されている。[2]（著述目録にはふれていない。）一応、その様に推定はされるもののその誤りは、明らかであって、両方を比較検討してみると、次のような相違のあることがわかる。(1)分量も約二倍に増加していること。(2)例語例文に異同のあること。[3](3)註解の附されていること。(4)語彙集の場合と同じく、仏訳本は、日本語を主としているので、記述の順序もおのずと異なること。従って、仏訳本は、「新紀要」を、

そのまま譯訳したのではないと結論できる。（後考をまつ）かく、仏訳本と原本（原型）との関係を見て来たが、多くの点で、仏訳本が整理記述されている。ただ単に、原本の逐語訳ではない。即ち、スエーデン語の「旅行記」の部分と、ラテン語の「日本語観察」の部分を、仏語訳し、それが、更に、増補合綴されて出来上ったのである。附加された部分については、或は、別にツンベルグの記述したものがあるのか、または、訳者ラングレの私意が加えられたのか（仏訳本は、ラマルク・ラングレの二学者の注が、あるので、ことに有名である。）俄に判断を下し難い。しかし、(1)原本と仏訳本の近接した出版時であること。(2)著者は、一八二八年の没なので生前仏訳本に接する時もあったであろうこと。また、(3)なんの断りなしに訳者が私意をもって人の著書を改変することも考えられないこと。などから考えて、少くとも仏訳本が、著者ツンベルグの考えを伝えているものと解して誤りないと信ずる。いわば、著者の日本語智識がまとめて記述され、一貫した見方の出来る便宜さえ、ともなっていると解せよう。ただし、自分としては今後ともこの増補の理由について調査して行きたい所存である。

ツンベルグの位置　ポルトガル人が来日して、布教用のために、辞典・文典・語学教科書等を作った事は、よく知られているところであり、ロドリゲスやコイヤード[4]を含めた、これら、外国人の功績は、今更いうまでもなかろう。そして、その後は、外国人の日本語研究が久しく断えていた。しかし、十八世紀後半には、ロシヤは、カタリナ二世の命によって「世界言語比較辞典」を作り、日本語をのせた。また既に、一七六八年（明和五年）イルクーツクに日本語学校を建てている。（ドイツの学者・クラプロートが、一八〇五年そこで、日本語を学んだという。）ツンベルクは、このような頃、来日して、日本語を観察し記述した。自然科学者らしく、宗教的見方を離れて日本語を観察したのも興味があり、また時代が、江戸時代後半期の近代語発達時代のことである点からも、その史的位置が注意される。彼の著書が、すぐに諸国語に訳されたのは、東洋へのエキゾチシズムとか、植物学上興味ある文献とかに主な原因があるものの、やはり日本語が、次第に世界的視野に入りつつあったためでもあろうか。[5]我が鎖国後は、オランダ人が、日本及び日本人を知り得る唯一の西欧人であり、幕府から受けた処遇からすれば、彼等こそ十七世紀初頭のキリシタン宣教師達以上に、日本語研究の業績を残すことが出来たはずである。しかも、オランダ人には、この方面で一つも見るべきものがない（この点ツンベルグも彼等を非難している）。であるから、ツンベルグの日本語観察はわずか百余ページの短少なものであり、短い滞在のこととて十分に考察が、行きわたらなかったということも考慮されるが、とにかく注目すべき業績なのである。従来植物や経済方面から研究されていても、彼の言語観察の業績が余り顧られなかったのは遺憾であった。ツンベルグの前には、ケムペルの来日があり（一六九〇年―元禄三年九月）、後にはシーボルト等が来日した（一八二三年―文政六年八月）が、西欧人の日本語研究の見えない頃であり、キリシタン系と異る要素もあって、その観察記録は十分注意されてよいと思う。

なお念のために、また、著者に敬意を表す上から、ツンベルグの経歴の一端を最初に紹介しておく。(6)

Carl Peter Thunberg（Karl Peter Thunberg）（1743—1828）：スェーデンの植物学者。有名な植物学者リンネの後を襲ってウプサラ大学の教授となる。一七七〇年八月十二日ウプサラを出発、アフリカの喜望峰を廻って南洋に出る。（ジャバ滞在三ヶ月の短日月の中でもジャバ語彙集を作っている。）一七七五年（安永四年）八月十四日長崎に入港。翌年江戸に上り、同年十二月二日長崎出帆。一七七九年（安永八年）三月十日故国に帰着した。滞日中植物採集や医師として活躍。中川淳庵・桂川甫周は教えを受けた。仏訳四巻本の第一巻扉の次に著者の肖像写真がある。なお、ツンベルグの発音はいろ〳〵に呼ばれているので今は山田氏にならって、ツンベルグとしておいた。

ツンベルグの観察を整理すると　(1)日本語学習　(2)日本語と外国語　(3)音と文字　(4)動詞　(5)実詞・形容詞　(6)代名詞（待遇関係も加えて）　(7)副詞・前置詞・添詞　(8)数詞　(9)外来語　(10)文の表現　(11)語彙とその登録法(7)

以上大体十一項目になろう。順次考察していく。

(1)日本語学習　安永四年八月来日した彼は、秋・冬の間に、日本人の通訳について、話すことと書くこととを学んだ。彼にとって慣用語法の学習は、かなり骨が折れたという。当時の国内状態から彼等の学習は、ごく秘裡で行なわれたらしい。この様な中で彼が日本語の智識を得たのは　(イ)通訳からの直接口授によったこと　(ロ)自身の採集によって　(ハ)（拉・葡・日）辞典を老通訳から見せてもらった事(8)（彼自身の作成した語彙集の基礎は既成の辞典には仰がなかったもので、彼の説明では、その語彙集は実地に江戸参府の旅程で自ら筆録したという。）などによったのであった。

(2)日本語と外国語　「日本語は殆んど、ヨーロッパに知られていない。シナ語の様に垂直に書くが、両者の違いは、互に通訳がいるほどである。シナ語は、学者語（Une langue savante）として通用している。」――これは特に注目する程の事もなかろう。ただ他本は、ここで言語記録が終っている。

(3)音と文字　ここでは、(イ)日本語には、ヨーロッパの文字で表現できない発音が沢山ある。(ロ)同じことばでも沢山の書方がある。実際には、次の様にR・L・F・H等に混同代用が見えるという。

(1)	R と L Farrou	(貼る) Fallou
(2)	H と F Fakama	(榛) Hakama
(3)	B と K Toriaguibuba	(振上げ燕) Toriaguikaka
(4)	B と M Fitomosi	(火ともし) Fitobosi
(5)	K と G Kourouma	(畦) Gourouma
(6)	F と B Fas	(はし) Bas
(7)	P と F Nipon	(日本) Nifon
(8)	K と F Krombo	(凭坊) Forombo
(9)	D と T Metori	(代織) Mendori

右の中には、批判の余地があろう。(3)は、明らかに、別語である。(3)・(6)・(9)は連濁現象であって、はしがばしと単独では言われないと思う。(8)は、他の諸本にもあるが、果してK→Fと子音の交替があったか疑問である。おそらくくの発音で、母音が、軽く発せられてFに近く聞いたのではないかと思う。(2)は、考えてよい。

コイヤードも、「字母fは、日本の或る地方では、恰もラテン語におけるように、発音されるが、他の地方では、恰も不完全なhの如く発音される」と言ってるのだからF↕Hは、ツンベルグの頃兼用（交替）されていた事は確であり、寧ろ完全にHのみでない事を語る一証左となる。これは一面、彼の手がけた対象語の性格によろうが語彙集を検すると、Fの綴が、殆んどであって、Fa↕Ha・Fo↕Hoの点で、いく分交替が見える程度である。しかも、「灰」は、Hai, Fai（原本同じ）とあるが、「蠟」はHai（同上）とあるだけである。「歯」・「葉」についても同様である。（Hi, Hu は見えない。）F音は、十分彼の耳にあったと解される。この点(1)は、R・Lのどちらでもよいのであって、原本を見ると、「猿」を Apa, markatta ; Saru, Fatu と綴ってある。日本語のラ行音がR・Lのどちらでもなかった事によろう。（外国人のすべてに共通の事である。）以上の他、前期と比して注意されるのは、(ハ)二重母音がない——の指摘である。コイヤードは、「二つの母音の各々は直接に結合されている時、元のままで、夫々独立して発される。V_a; V_o; V_i の様に。」と言う。（但し、音便の時は別である。）ツンベルグのは、「ai→e; ae→e; oi→e; oe→e」となってゆく後期の音変化と同一に解してよかろう。これはただ、土地（中央・地方等）その他P・CHの文字のないこと、同一発音で意味の違う語（血・乳・地など）等を述べ、最後に語末・語間における母音の無声化を述べている。「大部分の語は、その終りにあって母音iとouは、全くか、ほんのかすかしか発音されない。」——という。実例を示すと、（語末の時）

Semekou } 発音せよ { Semekv （茸く） ※原本も同じ
Torou } { Torr' （取る）

Tchakou } 発音せよ { Tchakf （着） ※原本も同じ
Abramoussi } { Abramouss' （油虫）

※殊に動詞の場合（不定法）は「二・三の子音のあとでは、f或はVで結ばれる事。ごく稀に、かすかにしか発音されない。」として例を上げている。

○ Iakou →Iakf（焼く） ○ Jedorou→Jedorou（設ける）
○ Migakou→Migakf（磨く）○ Fourou→Four'（踏る）
○ Makou→Makv（撒く） ○ Tobou→Tob（とぶ）

右は、コイヤードが「iまたはuで終る単語が、日本人によって発音される時には、最後の母音は、初学者には殆んど聞き取れない。」と指摘しているのを明確に一歩前進させている。口の開きの少いi・uの両母音が無声化する事はしばしば言われており、現代語へ直接つながる近世語の音観察として注意してよかろう。語間については、「語幹（le corps des mots）中の母音は発音されない。たとえばAboura→Abra ; Kokora→Kokra ; Foukai→F'kai」——という。一般に無声子音の間にはさまれた時の母音の無声化から考えると、始めの例は疑いも持たれるが、b自身がひびかなくなったのであろう。ともかく無声化が一つの傾向として、どん〳〵押進んで行った様に思われる。母音の無声化が、主として東国方言に見えると言われるが、かかるツンベルグの指摘はどう解すべきなのだろうか。江戸滞在中、くわしく江戸詞を観察記録する暇はなかったはずであり、やはり、九州（後述）・通訳・

参府途中の日本語観察の結果から帰納し得たものであろう。すると、当時の日本語の一般現象と解して良いと思う。

(4)動詞（Verbe）「動詞の殆んど大部分は、対象を指示する実詞（Substantif）或は、形容詞（adjectif）が、為る（Sourou）という動詞と一緒になる事によって作られる」――とある。例語としては、

- Jasouri sourou　（もすりをかける）
- Tsougin sourou　（通告する）
- Song sourou　（謝する）
- Keso sourou　（化粧する）
- Sinegui sourou　（懇行する）
- Tsouben sourou　（通弁する）
- Karoukou sourou　（殿くする）
- Kabi sourou　（かびる）

一応「する動詞」と呼んでおくが、漢語にするという動詞のついた形が中心をなしている。現代語と考え合せて、する動詞の増加傾向を告げるものである。ただ彼が大部分と言っているのは、どれほど信憑性があるか疑問になろう(後述)。果して「かびする」等と言うであろうか。この動詞はまた「複合動詞(Verbecompose)」と呼んでいる。その理由は、自明であろう。（日本人のいうのとは異なるが…。）さらに見て行くと、二、三不審な点もある。

- Todo kourou（指定する）
- Tchakt torr（計る）
- Kimono tchaks（着物を着す）
- Fvo tsourou（漁する）
- Soubakki hakvo（つばを吐く）
- Kou-skve sourou（くしを入れる）

※（ ）内は、意味をあらわす。

これらは、「為る」と一緒ではない。「とどくる」は、一語であり、「くしけずる」は「くし・けずる」と切るべきであろう。（敢て推量するなら、「くしけ・する」とするの部分にアクセントが、おかれて聞えたのかも知れない）してみると、するの意味を表わす語との複合によると解すべきなのだろうか。彼の「する」は、形・意味の両方を含めて「する」のついた動詞を指していると解すべきである。[9] これも初期の様に複合度の弱い（コイヤードが指摘している。）のと違い時代推移を語るものとして注意してよい。次に不定過去（Le parfait）について述べよう。これは、「不定過去ほ、だで終っている。」という一条に伺える。例えば、

- Vassourou→Vassoureta（忘れた）
- Jaksakou→Jaksoksita（約束した）

で、多くの外国人と同様である。なお、この「た」で終るのを、「動詞から派生した分詞（過去分詞）及び形容詞」とも述べている。これら「不定過去・過去分詞・形容詞」の関係相違についてくわしく述べていない。只、(イ)述格に立つ時は、「不定過去」(ロ)実詞を修飾する時は「形容詞」とするらしい。過去分詞については不詳である。ロドリゲスやコイヤードの「目的分詞」は見あたらない。一般に、彼以前の人々が、ラテン文法の範疇によっている為、時と法に捉われ過ぎているのと比して、彼は、殊更に、時を問題にせず、むしろ、「時の副詞」(後述)に役割を当てている様に見える。之は不定法を連用形にとっている以前の人々と、終止形にとっている彼との違いにも見える。[10] 注意してよかろう。

(5)実詞（substantif）・形容詞（adjectif）　単独の説明は見えずに、語構成について述べている。(イ)「二つの実詞が、続いておか

れる時、属格が先立つ。そして、主格は添辞のによって結ばれる。複合された実詞も、同じ方法で作られる。」と。例語は、

◦Tori no sou （鳥の巣） ◦Ous no ko（犬の子）

◦Mougui no ka（小栗の芽） ◦Me no tamma（瞳）

これらは、今さら云う必要もなかろう。ロドリゲスは、これを本来の形容名詞の典型とし、（大文典屈折論）後に、属格に立った名詞の一用法と見るようになり、（小文典）コイヤードは身分差で、「の」・「が」の使用を区分している。前期は、「が」が一般的と考えてよかろう。それが次第に、「の」によって代わられ、「が・の」を詮議しないで済むようになったのであろう。只こゝでも、Te no gui（手杭；手の切？）：Ken no ki（毛抜き毛器？）とする類の失敗を犯している。次には、「もの・こと」という語と実詞及び形容詞が、一つになって詞（Verbe）を作る場合。

◦Nosoumi mono（盆物） ◦Iro mono （色紋者）

◦Makie mono （漆器） ◦Sasisou mono （指図人）

◦Damas koto （嘘き） ◦Hanna koto （永遠性）

※物については、同義語（「語彙集」の末尾にある。）の条で「人・財産」を意味する由述べている。

右は、今から見ると大部違う。たゞ、彼は、「ぬすみ」が、動詞から派生した名詞というので実詞につくとしたのであろう。形容詞の場合は、今の基準では見当らない。概観すると「二つの実詞が結合されて、その結果、いわば一個の合成語を成している時は、属格の助辞は不要である」というコイヤードの説明とほゞ一致しよう。語彙集や断片的な所から類推しても、実詞形容詞に関する彼の考えは、皮相的な観察に終っていて、満足な結論は導き出せない。従って、「もの・こと」と合して、実詞を作ることを述べている点を可として足りると思う。

(6)代名詞 自称代名詞から、順次列挙し、後に、其の使用法（身分的相違からの）に及んでいる。十分参考になると思うので、コイヤード（△印）と対比して例示して見る。

○自称わたこし（Vatakos）・わたくしども（Vataksdomo）単・複両用

おれ（Ore）・みすから（Miskara）・しぼん（sibong）かんなやんま（Kannajamma）※方言と関係あるか。※仏語では nies（一人称・複数属格）の語があってある。

△自称：わたくし（Vátacuxi）・それがし（Sorégaxi）み（mi）・みども（midòmo）・みどもら（midòmorá）・ちん・まろ（chin, máru）※国王の自称とある。

○対称：おまい（Omai）・おまいがた（Omaigata）さこもッと（Sakomotto）そこもッと（Sokomotto）・はゞなた（Hannata）わり（Vari）・ねうし（Neous）・あなた（Anata）・にぎあつ（Niguiats）

さゝま（Samma）・あなた（Anata）・こやつ（Kojats）ぬしの事であろう。

△対称：そなた（Sonata）・その方（Sonofo）・われさま（Váresáma）・こなた（Cónatá）・こなたさま・そなたさま・きしよ（qixo）・き方（qifó）・こくん（gókun）・きぜん（qiden）

※その他、複数には「ども・ら」の接辞をつける。「おのく」（11）の接辞もある。

○三人称：あのひと（Anofito）・あのひとたち（Ano fito tachi）

あのわり（Ano Vari）・これ・こり・（Kore; Kori）※物・人両用

※彼・彼女を同時に表す代名詞は、「あの人」が一般的である。――という。

△三人称：かれ・あれ・あいつ・あいつめ・あれめ・かいつめ・この・その・あの（これ・それ・あれとも。）・あのひと・あなた（あの方とも）※「あなた」が、ツンベルグで、二人称・コイヤードで、三人称であることは、十分注意すること。

○疑問代名詞：誰れ（Dare）・ひと（Fito）・なに・なゝに（nani：nanni）・※否定は「誰も…ない」属格は「誰が」とある事に注意すること。※「だれ」

△疑問代名詞：たれ（tare）・たそ（taro）・たが（tāga）・なに（nani）

以上で終るが、次に用法の説明を聞いてみよう。

お前＝話手が、話手と同等のもの、或は、友人と話す時。：当時の文献によれば、息子から父・娘から釈迦・娘同士でおまへと呼んでいる。従って、目上へも言った筈であるが、……。もっとも、後期になる程、水準変移が見える。過渡的記録として注意してよかろう。

わり＝話手が話手より低いもの達へ話す時。

ねうし（ぬし）＝右と類似するが、一層低いもの達へ話す時。

こやつ＝この上なく無礼な言い方。

はゝなた＝一番家柄の高い人々に対してか、人々が、尊敬しようとしている人々に対して使う。

さゝま＝目上の者に対して使う。或は、殿様や主人の代りに使われる。

にぎあつ＝最低の人々へ話す時。

右の様であるが、ほゞ当時の文献に照してみても妥当する。以下、少しく考えて行って見る。まず自称の「おれ・かゝなやゝまが注意される。前者は、近古から見えるというが、やはり近世後半期の特徴であろう。男女共に使っている。後者は、全然見当がつかない。方言なのか誤綴なのか。後考をまちたい。猶「わし・わっち・わちき・おいら」などが指摘されずに、「しぶん（自分）・みすから（自ら）」があるのは、対称語彙の関係にもよるのであろう。対称では、上ですこしふれた様に「あなた」の記載がうれしい。この「あなた」は、この所で、説明がない。後の文の表現では、頻出する。目上に対する時が多い。同じ年出版の「物類称呼」には他（ひと）をさしていう詞の条に「畿内にて吾身（あがみ）という。東国にて、おのし又おぬし又そなたと言…（略）」とあって、「あなた」の指摘はない。多分、これが、二人称のあなたの最初の指摘記録といってよい。只、物の本では、西鶴等の浮世草子・洒落本などに見える（従来宝暦頃とあるのは誤り。）し、人情本等では、「貴公・貴嬢」の漢字にあなたを与えている。

その他、「はなた」（あなたの一種か）・「にぎあつ」は、確証がない。後者は多少汝等を意味する沖縄語との類推もつきそうだが、疑いを残しておく。又一般的である「そなた」のないのも疑義の一つといえよう。三人称は、特に言う事がないが、「こいつ・あいつ・こいら・あいら」などがないのは、やはり対称語彙の関係であろう。「あのわり」が、「低い者どもへの話し掛」に用いるとあるが、「わり」は「われ」と同類であろう。疑問詞の「だれ」の指摘は、「たれ↓だれ」の推移の上からも尊い記録である。江戸では、普通に用いられているが、両語の転換時期は明確にし得ないので、安永期のこの記録は、古い方と言ってよい。倭訓栞には見えるが、俚言集覧には、「たれ」とある。土井忠生先

生は「室町末」から、現われていると言われる（文献は上げてない。）以上代名詞は終るが、いずれも「人々は、彼が、口する人の身分によって、全く違った語を使う」という観察から出発している。

(7)副詞（adverbe）・**前置詞**（Préposition）・**添詞**（particule）「他の特殊な事（即ち、附加的な事）を例示するには副詞・前置詞・添詞を用いる」と説明して、三者混同して、「八十語」程登録している。（個々の説明はない）この中には、場所や理由の語詞が混在しているので、ADVERBESを副用詞と訳して副詞・接続詞・感動詞と細分した方がよいかと思う。別に「時の副詞」（ADVERBES DE TEMS）もまとめている。今、私意を以て適当に語彙を分けてみる。※今と、意味の異なる時は適時、註記をしておく。

○副詞：だいぶん・たくさん・おーか・かいこと。（がい（方言で沢山の意））と関係あるか）そんぶん・あまり・軽く・軽か・どう・どんな。さたい。（総体に）・おかた（おおかた）・およそ・同じく・まっすぐに・おか・とおか（「おか」はT音が弱かった為であろう。）・とんがり（仏訳は「最も近い」とあるが、方言「どんが（最後）」と関係あるか。）・どこ・ここあそこ。どけ・なし・なしなれわ（何故なれば。）：こんにち・きょう・けさ・昨日・きの・一昨日・おととい・あす・あした・みおにち・ゆう・よせさり（夕方）・こんや・こんばん・たびばち・せっせと（屢々）・ついに（決して）まだ・あいだ・あり時は・たま〳〵・いつ・おつけ（おつっけ）・早く・何どき・れいげつ（来月）・みあがにん（明後年）

○感動詞：いね・いゝね・いんな・いやいや（以上、否）・はい・あい・へい（以上、承知の返事）

○接続詞・助詞[13]：か（……に関して）・まわり（……の為に）・まで・の・また・の（そして）あわ（或はのことか）以上で終る。彼の分類は、殆んど西欧のそれを基にしているので、形容詞・名詞も副詞に入れている。参考迄に述べておいた。※なおparticule（添詞）は、前置にいえば、国学者達のいう「てにをは」にあて、考えてよかろう。名詞・副詞等をのぞいた、不変化語を一般に指すとも考えられる。

(8)数詞　数え方に「よみ」と「こえ」があるという（コイヤードも同じ）。注意されるもののみあげると、「一」は「ひとつ・いち」の二つがあるというのである。二、三記しておくと、「九」は「く・きゅう」の両読み（コイヤードは「く」のみ）・「百」も「ひゃく・ちゃく（しゃくに近い）」・「千」は「一かん・てん（せんの誤か）」・「萬」は「まん」（コイヤードはない）「十萬」は「おく（億？）」とある。分数は、コイヤードに見えない。「二分の一」は「はん・はんぼん・はんばん」・「一と半分」は「しとつはん（しの音に注意）」・「四分の一」は「しがいち」「片」は「きれ・ひれ」・他に「丁か半か」・「一対」・「つがい」・「すい（足？）」・「両方」・「一ちょう」（酒、蠟燭について。）・「一びょお」（砂糖について）等が見える。

(9)外来語　「日本人が、外国人からうけ、且つ、外国人によって知らされた多くのものは、その儘オランダ語、或は、ポルトガル語が保持されている。」――として、次の様な外来語をあげている。（　）内に、私註を施した。オランダ語・ポルトガル語は、それ〴〵「オ」・「ポ」と略記した。）

○タバコ（オ）○ポルチュギス油○ビル（オ）○ウニコルン（英語：unicorn）○ボテル（オ：バター）○カルタ（ポ）○ランセッタ（オ：平針）○パン（ポ）○サボン（ポ：石鹸）○フラスコ

（ポ）ディヤマン（オ：ダイヤモンド）○サフラン（オ：saffraan）○バゾ（ポ：皿）○チュカトン（イタリ語？：Ducatoon 欧洲貨幣）○ガンス（オ：鵞鳥）○かがみビイドロ（硝子鏡）○アデルラテン（オ：Aderlating 刺絡）○スケルベッケン（オ：床屋の使う髭そりコップ）○フォク（英語或はオ？）○カナノルいし（著者の註記の「ポルトガル人が、印度の都市カナノルから日本に運んできたから」がある）○ケンタ（イスパニヤぶどう酒）○ボルテのかす（オ：バターとチーズ）○カピタン（オ：船長）○クロコヂル（オ：鰐）○ポック（オ：Pok 痘瘡・性病）○バンコ（イスパニヤ語：銀行）○ビイドロ（ポ）○コップ（オ）○テリアク（オ：解毒薬）○バン（ポ：ぶどう酒）○ハカ（ポ：小刀。庖丁）※紙数の関係で、特別なもののぞき原語は、削愛した。

ロドリゲスやコイヤードに、かゝる例語のないのは、語の貯蔵のない頃とて当然であろうが、ともかく少数でも、かくまとめてあるのは幸であろう。語彙集を検すれば他に「ビロド・ボタン・ドンス・キセル」などがある。既に、浮世草子にも「天鵞絨（ビロード）・縅（オドシ）・合羽（カッパ）・煉管（キセル）・ぼたん・らっぱ・ちゃるめら」等が、定着された字形で見える。ツンベルグのは、まさに九牛の一毛にも満たないだろうが、外来語の一端とその消長を考える上に多少参考になろう。例えば、「ハカ」が、長崎土産（一六一五）・蘭説辨惑（一七九九）に見え、更に、現代長崎方言で、小刀・ナイフを意味している。

(10) 文の表現(14)　はじめに敬語（法）にふれている。動詞「与える」が、「おせっけやれ・やれ」と人によって異る表現をとり、殊に、礼儀正しく、尊敬を以て言う時は、「くおだされ（下され）という」と述べている。しかし、これはごく短い記事で、中心は、次例の様に「二、三動詞の変化、構造、慣用について例を加えたり、文の構造と話し方について例を加えねばならぬ」という所にある。今、私意によって、それら例文を分類してみる。どうして、その様な表現をとるのか特に理由などにはふれていない。片仮名は、現代語訳を示す。

(A) 普通文（「書く」を例にとる）※必要に応じて、原綴をあげておいた。〈〉内は、私註

あの人、かゝります（mas）
あの人、かかりました。（masta）〈過去〉
あの人、かかりまッす。（massou）〈未来〉
わたくしども、かきまッした。（massita）〈過去〉
わたくしども、かきまッす。（massou）
あの人達、かかしまつる。
あの人、すこおで、ぐせります、かかこと。（希求）
（アノ人ハ、今ヤ書コウ思ッテイル）
わたくし、やりたい。すかわしたい。（希望）
このはなは、かれた。かぜは、ゆか。

(B) 疑問・否定文（疑問詞を含むのは後の部分。）
わたくし、たっせん、ぐせります？（—mass）〈現在〉
おまい、息災に、ぐせります？（-mass）
ごきげん、よ、ぐせりますか？（-maska）
あのしと、ごきげん、よ、ぐせります。（返答）
よ、ぐせりまッする。（返答）
まだ、やがッす、ぐせりますか。？
あのひと、おかさん（妻）、よ、せります。（—mas）（返答）

何故ニ
なしに、オソク おそき、おいで、なせりまかした?
きのそ様(人名)、こにち、(今日)いかゞは、わたりなッする?
自分
しぼん、ごそそ、のせりまッせ(私ハ、アナタガ息災デアルコトヲ望ミマス)
あのおいんば、よ、みのせり?(アノ梯子ガ、ヨク見エナサルカ)※おいんば(cinba)は、梯子?
・あい、よ、ぐせります。(返事)わたくし、何いたしまするか?
おまいゆわ、こにち、なんになッせりもす?(mos)
ココニ、イツ、オリトキ、ナセリマシタカ?
なにもなか。(返答)
おさか、いつ、おたし、なせりましたか?
何も、不詳な事は、ぐりまッしんか?(—massinka)
あの人達、よこもと、しかにましてん(masting)
わたし、貴
かわぬ。(否定)
長崎は、ど、ぐせりました?
あなたは、こゝに、久シク ひさす、とりなせりまッしんか?
来ぎつ迄、とりを、いたしまゆう(majon)〈意志〉
なんどき、ぐせりか?(何時デゴザルカ)
なにの、おのさみで、ごせりまつか(matka)〈希求〉
かせすき、の、ぐせります。
どりからで、くせりますか?
あなたの、おさかの、はぼりから、(大阪ニイルアナタノ友カラ。)※はぼり(haori)は友?
なは、ど、五郎兵衛ト申シマス むすますか?(モウシマスカ) ごろべと、もしむす。(moussou)

以上で終る。大体、肯定・疑問・否定希求・現在・未来・過去に分けて見られる。(総計、百の例文)出来る限り考えてみたが、用例文で明確にしえないものが多少ある。劃癈した部分も考慮に入れて結論を出してみると、(1)現在形で現在・未来を表す。(綴は異る)(2)「ござります(ぐせります)・ます・もす」が述部で、「だ・です」は見えない。(3)過去は、「た」で表す。単独より「ました」が多い。(4)否定は、「ませ(し)ん・ましてん」・「なか」・「ぬ」等、(5)疑問では文末に「か」を、添える時と、否とがある。(6)希求は「ませ」「たい」「お望み……」の形で表現している。(7)「ます」は「ました。ます。まする。ませ。ませ(し)ん」の型が見える。(綴字から解して、閉音節の語も含まれよう。(後述)(「もす・まする」は後でふれる)

(7)

紙数の都合上(1)項は劃癈し記載語彙について私見を加え、現代方言と関係あるのを若干摘出して拙論を終りたい。まず、語彙の特徴としては、

○肥筑方言の様相:「カ」型形容詞。丁寧の表現に「マッス・マス」を用いる。打消は「ン」。「為よう」は「シュー」又は「シュ」。命令は「セ」で、打消は「セン」。語頭にヤ行のエ。「クワクワシュ・シェ」などの音がある。○薩隅方言の様相:敬語動詞のゴザル。「ジ→シ」(例えば、虹)「ミッ(水)」のような閉音節。「モス」等。(綴字と音については、なお一層考究を要する事をつけ加えておく。)

他に、動詞二段活の九州方言の特徴も見える。肥筑方言の様相を持つ事は当然であるが、方言自身にも史的変化がある筈だから、以上両方言区の様相を持つと考えてもよかろう。少数の語彙に、すぎないが、現代へのつなぎとして「霊蘆圃雑記」の「長崎の方

言」・その他随筆類に散見するものも参考になる。次の語彙と一緒に比較されたい。方言研究の一資料となりうる事は、まちがいないと信ずる。

◎語彙集より抜萃した若干の語彙（原級は省略した）

(1) あてる（軽くなぐる）：南島八重垣
(2) あせが（ろ）（いらだつ）：福岡県・長崎県・熊本県
(3) いげ（棘）：九州地方
(4) いどる（座る）：対馬・大分県・福岡県・九州地方
(5) いがわ（井戸）：筑後久留米・広島能美郡・九州地方
(6) いびがに（指輪）：南島八重垣・九州地方・中国地方
(7) いすすみ（石炭）：山口県・大分県・佐賀県
(8) うまくち（接吻）：長崎県※「やわらかく口をおしつけること」と仏訳されている。
(9) えどる（透き写す）：岡山県・島根県・和歌山県
(10) かぶと（鶏のとさか）：愛媛県・高知県・九州地方
(11) かかる（さわる）：長崎県・佐賀県・熊本県・鹿児島県
(12) かだいし（火打石）：奄美大島・鹿児島・大島・福岡県大分県・富山県南部・筑後久留米※「かどいし」とある。
(13) きさない（汚）：大分県・鹿児島県・種子島・長崎県
(14) ごご（少女）：長崎県・日向・壱岐・物類称呼
(15) こし（蛆虫）：長崎県・西筑摩郡・三重飯南郡※「こじ」とも。
(16) 鳥のさゆる（鳴くこと）：壱岐・熊本県葦北郡
(17) さま（窓）：仙台・群馬県・茨城県・大分県・福岡県・長崎県・佐賀県・熊本県
(18) しわもき（咳）：長野県※「しわぶき」とある。
(19) しわばる（しゃぶる）長崎県・出雲地方
(20) たんご（桶屋）：宮崎県・鹿児島県
(21) てねき（手袋）：長崎県・熊本県玉名郡・鹿児島県谷山※「てぬき」とある。
(22) とぼせ（赤米）：鹿児島県※「とぼし」とある。
(23) どんな（馬鹿）：高知県・大分県・宮崎県高千穂
(24) にぎる（頑固）：和歌山県・徳島県・高知県※「にがる」とある。
(25) のろ（泥）：筑後久留米
(26) はぎし（歯茎）：長野県・新潟県・島根県・大分県・熊本県・壱岐
(27) ばば（兄）：長崎県・佐賀県・壱岐・対馬・筑後久留米・九州地方
(28) ふし（流儀）：大分県
(29) へぐら（鍋墨）：肥筑方言※橘正一氏による。
(30) ほげた（頬）：和歌山県・愛媛県温泉郡
(31) ぼ（裸）：「全国方言辞典」には見えない。※台湾の蕃族に類似語「ぼぼ」がある。
(32) ぼぼ（女陰）：全国的
(33) べこ（蝶或は蛾）：鳥取県・兵庫県
(34) よせり（夜）：九州地方・近畿地方・中部地方・仙台・山形
(35) けた（木材を積んでおく所）：徳島県祖谷

※ 註記は、「全国方言辞典」・「大辞典」による。

あとがき

細かに検討すればまだ〳〵多く学び取る事ができ、翻字の点では、幾多の疑問が介在していると思うが以上で研究報告を終る。

拙論を批判して下さる方に、是非次の論文の併読をお願いする。註で述べたが、吉町義雄先生の「九州の方言」の中で資料を上げてある部分（拙論の「壺蘆園雑記」は、あげてない）。新村

出先生の「東亜語源志」の中の「波行軽唇音沿革考」及び「国語におけるFH両者の過渡期」（ツンベルグの事に、ちょっと、ふれている）の二論文。

なお彼の対象とした語文の性格について考える場合に、（はじめに少しふれたが）土地方言の性格以外にも、彼の接した階級（武士・学者・智識人）と通過した土地（今の鉄道線路とほゞ一致している。山陽・近畿・東海・江戸）についても一考を要する。さらに当時の都市（城下町・港町など）は、割合に全国的性格を持ち、中でも、江戸・京都・大阪・長崎などの文化の高い諸都市は次第に全国的な共通語が話されつつあったと解してよかろう。また武士とか学者とか、殊にあらたまった話し方などでは、共通した一定の語文があった事であろう。まして、発音や、一々の単語についてはその土地固有のものに加えて、共通に理解される、いわば文化語（これが江戸詞を中核にするか否かは別としても）の普及が、行なわれつつあったと考えられる。ただ個人々々の話し方や表現のような場合（特に土地の人相互の間の場合など）は、ツンベルグの「文の表現」でもうなずけるように、方言的特色が濃厚であると思う。私がツンベルグの日本語観察を、あえて江戸後半期の日本語観察記録として受入れたのもこのゆえである。もっとも、これには、種々の異論もある事と思うが、上のような性格を考えて方言的性格と共に、一般的な国語の性格を表示していると解してさしつかえなかろうと思う。

稿成るについては、多くの方々の御教示御協力を頂いた。とりわけ、中田祝夫先生には、種々励ましやら御配慮を願った事を心から御礼申上げる。またウプサラ大学図書館長 Tōmes Kleberg 氏には資料の件で、御教示を得た事に厚く御礼申上げたい。また末筆ではあるが東洋文庫岸井大慧先生の御尽力に深謝の意を表したい。

〔註〕(1)「国語科学講座」（明治書院）の「九州の方言」（吉町義雄担当）で、本書名が、紹介されており、雑誌方言の「三巻・九号」に「日本語観察」（OBSERVATIONES IN LINGVAM IAPONICAM）が、やはり吉町先生の解説を附して凸版覆刻されている。（まだ、日本語訳はない。）旅行記の方は、仏訳本による「ツンベルグ日本紀行」（山田珠樹訳）が、異国叢書の一つとして駿南社から昭和三年に翻訳出版された。（四巻本による）但し日本語観察の大部分は省略されている。又独訳本による日本語訳は、故藤川次郎氏によって未定稿として訳され長崎の古賀氏が保管されている由である。なお、私の使用した仏訳四巻本の中、本論に直接関係ある部分の呼称は、「XIV De le langue japonoise-Regles grammaticales de cette langue-Vocabulaire japonois. —Notice de quelques ouvrages; VOCABULAIRE JAPONOIS. Rédigé par Ordre alphabétique et suivant l'étymologie des mots.」

(2) 註(1)の「方言」に述べている。なお訳本には、独訳二巻本・英訳四巻本・仏訳二巻本・同四巻本がある。本文に述べたように、独・英は、殆んど原本の儘であり（東洋文庫蔵本による。）仏訳本（二巻本はまだ見ていない。）が、他本と異る。吉町先生は、二巻本と四巻本を同様に解されているようである。

(3) 例えば「同音異義」に次のように見える。

○新紀要：fanna flos. fanna nafus. fanna angulus.

○仏訳本：Fanna, fheur, nez

仏訳本には、ラテン語の「角（透）(angulus)」にあたる訳語がない。（羅日辞典には見える）

(4) 大塚高信訳：「コイヤード日本語典」（一六三二年寛永九年）があるが、この記述と当時の実際国語と比較して考察している論文は見当らないようだ。彼の説明は、当時の国語の状態をよく観察記述していると思われる。前より一層利用されるべきものである。拙論では、比較の意味で援用した。

(5) 日本文学大辞典：国語学の項参照。

(6) 大百科事典（平凡社）The new International Encyclo-paedia, vol xxii を参照したが、彼の研究資料として、（植物学上の事が主であるが。）「ツンベルグ研究資料」(Forsknings material rörande C. P. Thunberg by the Science Council of Japan and the Botanical Society Japan at Tokyo in 1953) がある。まだ、しっかりした調査研究はない。なお、大正十四年、長崎で渡来百五十年記念会挙行。昭和廿七年十月・十一月にそれぞれ東京・長崎で、「ツェンベリー生誕二百年祭」として記念講演会が行なわれた。（日本とスェーデンの植物学会の共催）

(7) 本論文で詳述できなかったので、次に略記する「開くる」を例にとる。（翻字を附す）

Akourou（あくる）分詞・形容詞用法
Akerou（あける）不定法
Akoubi（あくび）実詞あいている口と仏訳している。
Akoubou（あくぶ）口を強いて見ると仏訳している。

※なお、Akou を語幹と言っている。

(8) 彼の語るところを要約すると「古いラテン・ポルトガル及び日本語の辞書を見出し、それは、欧洲及び日本教友会が共同出版したもので九〇六ページあり、カルピンの辞書を基としたものであった。」と。「国語科学講座」で吉町先生の述べて居られるのと同一本であろう。

(9) 語彙集「する」の条でも、「たつる、つくる」を「する動詞」に入れ、文法観察の記事を参照するようにとの註記がある。

(10) 土井忠生先生によると、ロドリゲスは「ラテン語文法範疇・日本語そのものの文法現象」の二つの立場に立っているという。

(11) 猶、妻の呼び方として「おかった・にょおぼ・わたきにょぼ・おまいのおかった」が見える。

(12) この記述と共に「色の名」の項がある。二、三とりあげておくと、
○黒（Fouro・Kouro）○まよぎ・もよぎ（緑）
○むるんさき（紫）※其の他、白・黄・灰・茶など、現代語と同一のものがあげてある。

(13) 語数が少いので、くわしく出来ないが、私は、こう分類して記述しておいた。即ち
Adverbe（副詞・陳動詞・接続詞）préposition・particule（接続詞・助詞）前置詞と添詞に関する説明（区別）は、彼自身はしていない。

(14) 別に「日本の科学」の条で「日本の言葉は非常に古い言葉である。語彙に富み且つ、力強い言葉である」と述べている。

——早稲田大学文学部副手——